(有)西川経営オフィスサービス
中村会計
事務所便り
2010年11月26日(金)　NO.157
地域から明るい未来を作ろう

岐路にたちつつ

困っても困らない

動物園の動物は、食べる不安はない。他の動物から危害を加えられる心配もない。決まった時間に、いろいろと栄養ある食べ物が与えられ、保護されたオリの中で、ねそべり、アクビをしゆうゆうたるものである。

しかしそれで彼らは喜んでいるだろうか。その心はわからないけれども、それでも彼らが、身の危険にさらされながらも、果てしない原野をかけめぐっているときのしあわせを、時に心に浮かべているような気もするのである。

おたがいに、いっさいの何の不安もなく、危険もなければ心配もなく、従って苦心する必要もなければ努力する必要もない、そんな境遇にあこがれることがしばしばある。しかし果たしてその境遇から力強い生きがいが生まれるだろうか。

やはり次々と困難に直面し、右にすべきか左にすべきかの不安な岐路にたちつつも、あらゆる力を傾け、命を賭けてそれを切り抜けてゆく――そこにこそ人間としていちばん充実した張りのある生活があるともいえよう。

困難に心が弱くなったとき、こういうこともまた考えたい。

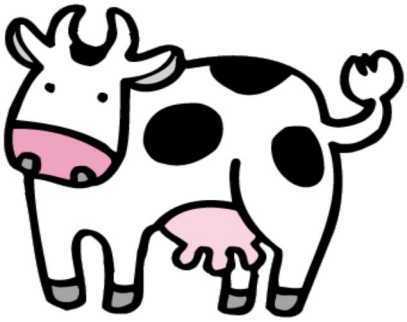
ひろい世間である。長い人生である。その世間、人生には、困難なこと、難儀なこと苦しいこと、つらいこと、いろいろとある。程度の差こそあれだれにでもある。自分だけではない。

そんなときに、どう考えるか、どう処置するか、それによって、その人の幸不幸、飛躍か後退かが決まるといえる。困ったことだ、どうしよう、どうしようもない、そう考え出くなり、せっかくの出る知恵せば、心が次第にせまも出なくなる。今まで楽々と考えておったことでも、それがなかなか思いつかなくなってくるのである。とどのつまりは、原因も責任もすべて他に転嫁して、不満で心が暗くなり、不平で我が身を傷つける。

断じて行えば、鬼神でもこれを避けるという。困難を困難とせず、思いを新たに、決意をかたく歩めば、困難がかえって飛躍の土台石となるのである。要は考え方である。決意である。困っても困らないことである。

人の心というものは、孫悟空の如意棒のように、まことに伸縮自在である。その自在な心で、困難なときこそ、かえって夢を開拓するという力強い道を歩みたい。

「道を開く」松下幸之助



考え方の転換

常識に挑戦を試みる。

「なぜ」という質問を徹底的に発してみたい。

過去に脱硬直化を成し遂げた人々は、事業の本質的仮定、常識そのものに対する挑戦を行っている。

長年の仮定が硬直状態を招いていないか。これらは依然として正しいか。

この仮定がなければ事業そのものが成り立たなくなるのか。

当たり前になってしまったことに対して「なぜ」という子供のような質問を繰り返し行うのである。

世の中の大発明は無邪気な「問い」から発生しているものが多いものです。

「いかなる問題にも解決策は必ずある」現象はあくまでも現象、結果にしか過ぎない。

変わらなければ明日がない、結果がすべてです。